

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成 30年 8月17日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 理学研究科

職 名・学 年 博士後期課程3年

氏 名 小林卓也

助成の種類	平成 30 年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	甲虫体系学ワークショップ		
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()		
発表題目	Divergent host use among cryptic species in the fungivorous ciid beetle <i>Octotemnus laminifrons</i>		
開催場所	チェコ共和国 プラハ チェコ生命科学大学		
渡航期間	平成30年7月7日 ～ 平成30年7月22日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000円	
	使用した助成金額	300,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空賃	125,750円
		ワークショップ参加費	38,458円
		国内交通費	6180円
日当・宿泊費		129,612円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 幅広い若手研究者に助成の機会が開かれている点が素晴らしく、使途の柔軟性や簡潔な手続き等もありがたく感じました。今後もこのような助成事業が継続されることを期待しております。		

成果の概要 / 小林卓也

研究集会名: Beetle Systematics Workshop (甲虫体系学ワークショップ)

開催場所: チェコ共和国, プラハ, チェコ生命科学大学

会期: 2018年7月8日~21日

<研究集会の概要>

本研究集会では甲虫の分類・形態学をテーマとして、参加者による口頭発表と議論を行う小集会と専門家数名がレクチャーを務めるワークショップが約2週間にわたって開催された。世界各国から甲虫類の分類・進化等を専門とする研究者及び大学院生が集まり、開催国のチェコを始め約17ヶ国30人程度の参加があった。小集会では参加者が自身の研究について12分程度の口頭発表を行い、それに続いて質疑・議論の時間が設けられた。分類学的研究に加え、甲虫類を研究材料として用いた進化や生態、行動、法医学研究など様々なテーマの発表と活発な質疑・議論が行われた。それにつづいて座学と実習を組み合わせた形式のワークショップが開催された。甲虫類は38万種以上が記載されており、地球上から知られている生物種の4分の1近くを占める大きな分類群である。本ワークショップではこの多様な甲虫類の形態的特徴を理解し、進化や分類、生態に関する研究の基礎とするために、ほぼ全ての科（分類階級の一つ、甲虫類は約180の科からなる）についてのレクチャーの受講と実験室における実際の標本の解剖・観察が行われた。

<発表概要>

報告者は自身の研究成果について“Divergent host use among cryptic species in the fungivorous ciid”というタイトルで口頭発表を行った。キノコや胞子などを摂食する菌食性は昆虫の重要な食性のひとつであるにもかかわらず、寄主特異性およびその進化に関する知見は極めて少ない。本発表では、多孔菌類を寄主とするツヤツツキノコムシ *Octotemnus laminifrons* (甲虫目: ツツキノコムシ科)

とその近縁な種間において明らかにした寄主利用の分化と系統関係の推定について紹介した。また本研究では3種の新種記載を行っており、本ワークショップは分類学に主眼を置いているものであることを考慮して、分類学的な側面についても組み込んだ発表を行った。発表直後には対象種についてのいくつかの質問を受けて応答した。また発表が集会初日であったために、その後のワークショップ開催期間を通じても報告者の研究について多くの質問や助言をもらい、議論を行った。

<参加の成果>

本ワークショップに参加したことで、報告者の研究対象である甲虫類の多様性について、座学と実習を通じて基礎的な理解を深めることができた。観察した標本の中には非常に稀で簡単には見る機械の得られないグループの標本やタイプ標本（種の記載の基準となる標本）など貴重なものもあり、ワークショップのレクチャーの一部でもあるプラハ自然史博物館やロンドン自然史博物館のキュレーターの協力により実現した貴重な機会であった。

報告者が研究対象としている分類群は非常にマイナーで、同じグループを対象とした研究を行なっている参加者はいなかったものの、共通したアプローチで研究を行なっている研究者からは有益な助言をいただくことができた。また、報告者の研究対象にも関連するプロジェクトが行われていることを紹介してもらうなど、情報交換も行うことができた。

また本研究集会・ワークショップの期間中は多くの参加者が同じ宿舎に宿泊し、食事も共にしたため、研究者間の交流を広げる良い機会となっていた。

<謝辞>

今回は報告者にとって初めての海外での研究集会の参加であり、大変貴重な経験となりました。本ワークショップに参加するにあたり、助成を行なっていた貴財団に心より感謝申し上げます。今後の貴財団の発展を祈念するとともに、今後もこのような助成事業により多くの若手研究者が海外での研究集会に参加する機会を得られることを願います。